

『劇場を世界に——外国語劇の歴史と挑戦』

谷川道子・柳原孝敦編著
東京外国語大学 二〇〇八年三月

「語劇」は二十六言語を専攻語として持つ、本学の特徴がもつとも顕著に現れる場であり、大学祭の中心的なイベントの一つであるとともに、学生が外国語の劇を上演するという行為を通じて、自己と言葉や肉体との関わりを見直すことになる貴重な機会でもある。本書は二〇〇五年から二〇〇八年にかけて「特色ある大学教育支援プログラム」として営まれた「生きた言語習得のための26言語・語劇支援」においておこなわれた、講演・鼎談や、それを対象とした論考・エッセイを収めたものである。「演劇・教育・「語劇」」「外の世界に拓いていく演劇／語劇」「身体を拓く・心を拓く・言葉を拓く」「文化修得のメソッドとしての演劇／語劇」「語劇百年」という五つの章で全体が構成されているが、これは語劇の性格に叶った章立てになっているといえるだろう。すなわち、語劇には演劇というパフォーマンスとしての自律性と、それを通して専攻語への関わりを深める教育の場としての側面が共存するからで、本書の内容も多彩な執筆陣・講演者・発言者を集めることによつて、この二面性をバランスよく追求している。

本書にまとめられる形でこのプログラムに関わったのは、谷川道子氏を中心とする本学の七名の教員と、外部から招かれた野田秀樹、栗山民也、鴻英良、松本幸四郎、島田雅彦といったゲストの講演者、執筆者である。この参加者の多彩さによつて、大まかにいえば語劇の持つ実践的な外国語教育の場としての性格は本学教員によつて考察され、パフォーマンス、文化表象としての演劇のあり方を、とくに異文化との交叉のなかで考える側面は、ゲストの参加者によつて担われることになり、両者が融合することによって、語劇の可能性と問題点が総合的に照射されることになった。

もつともこうした区分は便宜的なものにすぎず、たとえば谷川氏のように、演劇の専門家でもある教員にとつては、語劇は学生というアマチュアが外国語（氏の場合はドイツ語）を媒体として、観客という第三者が見るに耐えるパフォーマンスをおこなうという可能性を見極める機会である。谷川氏による「序章」の「語劇／教育劇の位相と可能性について考える」では、今触れた語劇の二面性が明確に論じられている。氏の観点によれば、演劇に取り組むこと自体が、人間を教育の原点に立ち返らせる意味を持つ。なぜなら「学ぶ」ことの原点が「まねぶ—真似る」ことにあり、真似ることが本来身体的行為である以上、劇の場で自己の身体に向き合うことは、学びに対する人間の潜勢力を覚醒させることにもなる。また演劇が他者の行動や感情を自分のものとして表現する行為であることは、他者に対する想像力という、人間にとつての重要な能力を賦活する契機ともなるからである。そして劇の台詞を「耳で確認しつつ、いわば身体で覚え、それを同じような同級生の相手との演劇的対話のなかで、

見てくれる人〓お客にも通じるようなところにまで稽古を重ねてもつていかなくはならない」と述べられるように、語劇の持つ「教育」の側面と、「パフォーマンス」としての側面は、十分連携し、ひとつながりになりうる。

序章で提示されている、語劇の二面性のうち、「外国語教育」の場としての面を焦点化しているのが、川上茂信氏の「語学教育としての語劇」である。ここでは、普段の教室においては主に「テキスト」を通じて外国語（氏の場合はスペイン語）の学習に励みながらも、どうしても自身の肉体と融合した形でそれを捉えることができない学生たちが、劇における虚構の行動に身を置くことを通して、はじめて肉体的な感情に裏打ちされ、他者の行動を左右する力を持った媒体としての外国語と関わるに至る過程が、自身の経験を踏まえつつ語られている。重要なのは、身体の体制が日本文化の浸透によってすでに規定されているために、「授業では関心がないのか恥ずかしいのか、棒読みですませるような学生でも、語劇で演じるとなると例外なく表情をつけてセリフを言おうとする」にもかかわらず、「スペイン語のイントネーション体系が身につけていないから、彼らなりの中間言語に基づく抑揚で発音せざるをえない。身振りも日本語的だ」という事態が現れることである。その点では語劇は、修得している外国語と生きた形で関わる機会であると同時に、そこで見出されるズレのなかで、自身の肉体に浸透し、行動や表現を規定してしまっている自国の文化をあらためて知る場でもあるだろう。

こうした言語表現を通じた自国文化と異文化のズレ、落差を明瞭に浮かび上がらせているのが、野田秀樹氏と鴻英良氏との対談

「赤鬼プロジェクト」と語劇」や、松本幸四郎氏によるモノローグ「古典と現代、日本と世界」である。前者では野田氏の戯曲「赤鬼」をイギリス、韓国、タイといった外国で上演する際に生じる問題に焦点が当てられ、後者では歌舞伎役者である松本氏が、ブロードウェイで「ラ・マンチャの男」を、イギリスで「王様と私」を主演した際に、英語によって自己表現することの困難をいかに克服したかという経緯が詳細に語られている。

野田氏の「赤鬼」については、本学の学生たちがタイ語の語劇として上演しており、対談につづいて、野田氏とタイ語専攻の学生たちとのやり取りが収められている。「赤鬼」は海辺の共同体に「赤鬼」と称される、異質な言語をしゃべる人間が漂着し、その他者性によって彼を恐れる共同体の人々が、「赤鬼」とどのような関係を結んでいくかを主たる内容として持つ戯曲である。共同体と外部の人間の間に生じる痙攣的な関係という主題は、時代や国を超える普遍性を持つようにも見えるが、決してそうではなく、野田氏によればアジアの観客にとっては共同体の内外的対峙とそれがもたらす疎外の問題は理解されやすい一方、ヨーロッパでは「他者」が宗教的、民族的といった多様な次元で生じるために、この作品の構図はきわめて「古い」ものに映ってしまうという。

これは戯曲の言説レベルで生じるズレだが、興味深いのは、舞台上では「モシヤモシヤ」という感じの音の羅列として表現される、赤鬼がしゃべる〈通じない言葉〉が、たとえばタイ語のようなアジアの言語を想起させる響きを帯びて現れるということである。その点では我々の肉体のはらんだ文化コードは、ナシヨナリティーに限定されない〈アジア人〉という次元でも

存在する多元性をはらんでおり、それが演劇という場で顕在化してくるのである。

したがって異質な文化コードにおける表現を具現化するためには、外的な〈形〉から入っていく方が賢明であるということにもなる。英米の舞台に立った経験を語る松本幸四郎氏は、歌舞伎役者として台詞と演技をこなすのに、先人から伝えられた発声や身振りを完全に真似るしか手立てのない世界に三歳から身を置いてきたために、英語の台詞に対して、内面の感情をいかに表出するかよりも、実際に英米人によって発声されたとおりを真似ることを重視したという。そこには〈見せる〉ことに徹したプロの役者としての意識が見て取られるが、オリジナルの表現をなかなか真似ることのできない語劇の場合にこそ、異質な文化コードのズレが問題として立ち現れてくるともいえよう。また「赤鬼」に戻れば、本学の学生がタイ語によって演じる場合、「赤鬼」の〈通じない言葉〉もそれ以外の役者の台詞も、日本人の観客にはとくに落差をもつて聞こえないという難しさが、戯曲にはらまれていた問題性が、上演によってかえって見えなくなる側面も存在する。これはもちろんタイ語による「赤鬼」に限らず、語劇一般が持つ困難であり、逆に内容を理解しようとするために、字幕ばかり見て肝心の舞台になかなか眼を向けてくれないという声も、出演者からしばしば聞くところである。

本書では、主として〈演じる〉側から語劇の意味について検討されているが、当該言語を解さない者がほとんどを占める観客にとつて、語劇とは何なのか、ということもさらに追求されてよいように思われる。収められたエッセイのなかでは、黒澤直俊氏による、静岡県大東町で本学学生によるポルトガル語で

の「桃太郎」を上演した記録は、〈見る側〉にとつて語劇がどういう意味を持つかを伝えるものとして貴重である。上演がブラジル人の多く居住する地域においておこなわれ、観客が日本人とブラジル人の融合体であったという条件はあるにしても、むしろそうした条件を積極的に活用することで、語劇が大学祭の外に向けて開かれていく可能性が示唆されている。大学祭の外における語劇という点に関しては、インド・パキスタンでウルドゥー語劇「はだしのゲン」が上演されたというきわめつけの例があり、麻田豊氏によるその記録は、開かれた語劇の可能性をラディカルな形で伝えている。

紙数の都合で、本書に収められているすべての言説に触れることはできないが、ここで紹介できなかったものも、どれも舞台という空間における異質な言語を媒体とする語劇という表象のあり方について、それぞれ本質的な洞察を含むものであることは確言させていただきたい。上演の写真が多く含まれていることも、対照の中味に読み手を近づけるためには効果的である。また渡邊雅司氏による、本学の語劇百年の歩みの紹介は、この長い時間の間に、大学や社会の変化によって、上演の条件が大きく変わったにもかかわらず、全体としてはこの催しに対する学生の熱意が綿々と保たれてきたという、変わらない方の側面を浮かび上がらせていて興味深かった。それは同時に、舞台という可視的な空間で、生身の人間が言葉と肉体を通して観客に訴えるしかない、ある意味では〈ローテク〉の域を超えられない演劇の持つ宿命を物語っているともいえるが、そこにこそ人間の営みとしての演劇の永遠性が垣間見られるともいえるだろう。

(柴田勝二)